今週の
倫理

2024.5.4～5.10

5月のテーマ ｜ 心の切り替え

1384号

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一―一九九九）の言葉を掲載いたします。

失敗したらどうするか

丸山竹秋

全力を傾けてやったのに、なぜ、失敗したのだろう。だんだん考えてゆくと、しだいにいやになってくる。こうしたときには、いったいどうすればよいのであろうか。

これは、きわめて深刻な問題につながる。些細なことならば、やり直しをするのも、わけはないが、大きな失敗になればなるほど、再起するにも、それだけの努力を必要とする。

だが、ここに、私たちは、しっかりと銘記しておきたいことがあるのである。

それは、人生においては、失敗というものは、つぎの成功の基礎になるということである。

だから、失敗をしたときは、もうだめになったと嘆き悲しんでばかりいないで、

『ここに、次の成功にたいする、支柱がひとつうちたてられたのだ』

と思うことである。

ざんねんだ、ゆううつだといつまでも思っているかわりに、

『これは貴重な体験を得た。このしくじりのわけをよく研究して、このつぎはもっとりっぱにやり直そう』

と心をひるがえすことが必要である。

人生の敗残者といったような人々には、こうしたやり直しの勇気をもたなかった場合が多い。

やり直しに勇気がでないのは、失敗を、ただ失敗とだけみて、成功ときりはなして考えている錯覚である。

失敗とか成功とかいっても、それは、ウラとオモテといったような関係で、べつべつのものではない。失敗しても、悲観をせずに、そのわけをよく調べて、朗らかな、明るい気持でやり直せば、成功するのである。失敗は、成功への糸をひいているものであり、失敗があることによって、自覚的に欠点短所が改められてゆくから、今度得られた成功は、あぶなげのないものとなる。まぐれあたりのような、また他人からの援助などによって恵まれた成功というものは、砂上の楼閣のようなもので、基礎がないからいつ倒れるかわからず、あぶなくてしかたがない。ところが、しくじるたびに、これは、あそこが悪かったからだ、ここがいけなかったからだと反省してゆけば、そこに強い支柱が打ちたてられることになり、これらによってうちたてられた成功の建物は、堅固である。

失敗したということは、いいかえると、そのわけを研究せよということだ。そのままにほったらかしに、投げやりにしておいたのでは、ますます不幸も多くなるであろう。自分でわからねば、すすんでわかった人に聞くなりして、その原因をたしかめる。そうして、いたずらに、人を、物を責めることをやめて、まず進んで、自分の方を改めてゆくようにすると、収穫は大きい。

（『幸福の決め手』より）

え・城谷俊也

一般社団法人倫理研究所法人局